

【主題】 おままごと遊びの充実を目指して

【副題】 見立て遊びから広がる子どもたちの世界

認定こども園長岡和光幼稚園なごみ保育園
ぺんぎん組

1. 主題設定理由（目的）

本クラスの子どもたちは、おままごと遊びに興味をもち、食べ物や道具を見立てたり、身近な大人の姿を模倣したりする姿が見られるようになってきた。

一方で、遊びの中でのやりとりはまだ一方的であったり、関わりが長く続かない様子も見られる。

そこで本研究では、おままごと遊びに着目し、子どもたちが自分なりのイメージをもちながら遊びを広げ、友だちとの関わりや言葉での表現が豊かになっていく過程を捉えるとともに、おままごとコーナーを保育室に継続的に設置し、子どもたちがいつでも遊び込める環境を整えることで、遊びの広がりや継続性にどのような変化が見られるのかを探る。

2. 子どもの様子や研究内容（実践）

①環境構成の工夫（食材・食器の整理）

これまで、食材や食器は一つの箱にまとめて収納していたため、遊ぶ際に必要な物を見つけにくく、出し入れもしづらい様子が見られた。

また、遊びの途中で物が混在しやすく、片付けにも時間がかかっていた。

そこで、食材や食器を種類ごとに分けて棚に配置し、それぞれの箱に写真を貼ることで、子どもたちが視覚的に分かりやすいよう環境を整えた。

その結果、子どもたちは写真を見ながら必要な物を選んで取り出す姿や、片付けの際にも「ここだね」と確認しながら元の場所に戻す姿が見られるようになった。環境を整えることで、子どもが自分で考えて行動する姿につながり、遊びや片付けがよりスムーズに行えるようになった。



②机作り（5月28日）

マットの上に食材や食器を広げた状態で遊ぶ姿が多く見られていた。しかし、遊びが広がるにつれて物が散らかりやすく、やりとりが途切れてしまう場面も見られた。

そこで、子どもたちがより遊びやすい環境を整えるために、机を作ることにした。保育者が提案すると、「テーブルがほしい」「ごはん並べたい」といった声が聞かれ、子どもたちも興味を示していた。

実際に机作りを進めていく中で、「ここに置けるね」「ごはん並べよう」などと遊びのイメージを膨らませながら関わる姿が見られた。机ができたことで、食材や食器を並べて遊ぶことができるようになり、友だちとのやりとりもより広がっていった。

机制作前↓



机制作後↓



<机制作の様子・完成>



③洗濯機作り (6月11日)

保育室にエプロンやタオルなどを干すためのひもを保育者が用意したことをきっかけに、子どもたちの間から「洗濯機を作りたい」という声が上がった。

保育者が実際に洗濯機を作って見せると、それを見た子どもたちは興味をもち、イメージを膨らませていった。その中でAくんが「虹色がいいんじゃない?」と提案した。

その提案を全体に伝えると、「いいね」「やってみよう」といった共感の声が多く聞かれ、子どもたちの中でイメージが広がっていった。そこで、虹色の洗濯機を作ることとし、9色の色をグループごとに分担して装飾することにした。



各グループでは、担当の色の折り紙を使ってちぎり絵を行い、友だちと一緒に貼る場所を考えたり、「ここに貼ろう」「もっと貼ろうか」などとやりとりをしながら取り組む姿が見られた。共同で一つのものを作る経験を通して、イメージを共有することや、友だちと関わりながら活動を進める楽しさを感じている様子がうかがえた。

<洗濯機作りの様子・完成>



おままごと遊びの充実を図るとともに、はさみの扱いに慣れることをねらいとして、うどん・ラーメン・焼きそばのめん作りや、にんじんやたまごなどの具材作りを行った。

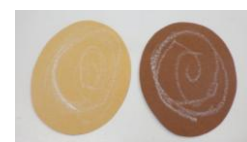
活動では、はさみの持ち方が不安定な子どもには保育者がそばにつき、一緒に持ちながら切り進めるようにした。一方で、扱いに慣れている子どもは、めんの長さを意識しながら自分で切り進める姿が見られた。

実際におままごと遊びの中で使用すると、複数の種類のめんが混ざってしまう様子が見られ、その都度遊び方や使い分けについて伝える必要があった。子どもたちは興味をもって遊ぶ一方で、イメージの共有やルールの理解には個人差があり、保育者の関わりが多く求められる場面も見られた。

このことから、より分かりやすい環境構成や遊び方の提示など、子どもたちが主体的に遊びを進められるような工夫が必要であると感じた。



<麺類・具材>



⑤冷蔵庫作り

保育者が運動会の競技で使った箱の活用方法について考えていると、Aくんが「冷蔵庫にしたら？」と提案した。保育者が「いいね、どうやって作ろうかな」と問いかけると、Kくんが「2段にしたらいいんじゃない？」とアイデアを出した。

子どもたちの発想を受けて、保育者が廃材を活用しながら冷蔵庫を制作し、ペットボトルやケチャップなども用意して環境を整えた。

その後、子どもたちは冷蔵庫の中に食材や皿をたくさん詰め込んで遊ぶ姿が見られた。身近な生活経験をもとにしながらも、「入れたい」という思いが強く表れていたため、保育者はその都度、子どもたちと遊び方を確認しながら関わった。

物の扱い方や使い方を一緒に考えることで、より心地よく遊べる環境づくりにつなげていった。子どもたちはやり取りを通して少しずつ遊び方を意識し、イメージを共有しながら遊びを楽しむ姿が見られた。



⑥ドリンクバー

ペットボトルを用いてドリンクバーを製作し、おまごとの遊びの発展を図った。活動を始めると、多くの子どもが興味を示し、自分の好きな味を選びながらコップに注ぐ姿が見られた。

初めは、ジュースに見立てたすずらんテープがボトルの中で絡まり、取り出しにくい様子が見られたが、繰り返し遊ぶ中でコツをつかみ、次第にスムーズに扱えるようになっていった。



また、友達同士で「何ジュースにした？」「〇〇ジュースもおいしいよ」などと言葉を交わしながら、やり取りを楽しむ姿が見られ、遊びを通した関わりの広がりが感じられた。

一方で、同時に遊びたい子どもが集中してしまう場面も見られたため、今後の改善点として、果物の色をイメージしたテープを床に貼り、順番を待つ列を可視化することで、よりスムーズに遊びが進むよう環境構成を工夫していきたい。

ペットボトルのドリンクバーという具体物を取り入れたことで、子どもたちの興味・関心が高まり、主体

的に遊びに関わる姿が見られた。特に、自分で味を選び注ぐという一連の動作は、生活経験とも結びつきやすく、見立て遊びの広がりにつながっていたと考えられる。

3. まとめ

本研究では、おままごと遊びを通して子どもたちのイメージの広がりや、友だちとの関わり、言葉での表現の変化に着目してきた。実践を重ねる中で、子どもたちは食材や道具を見立てながら遊ぶだけでなく、机や洗濯機、冷蔵庫、ドリンクバーといった具体的な環境が加わることで、より生活に即したイメージをもって遊びを展開する姿が見られるようになった。

特にドリンクバーでは、自分で味を選び注ぐという体験を通して主体的に関わる様子が見られ、「何ジュースにした？」などの言葉のやり取りが自然に生まれるなど、友だちとの関わりが広がっていった。さらに、机や冷蔵庫といった環境の充実により、食材を並べたり出し入れしたりする中で、生活に即したイメージをより具体的にもって遊ぶ姿が見られた。このように、具体物の充実や環境構成の工夫が、遊びの深まりや言葉での表現の豊かさにつながっていたと考えられる。

また、おままごとコーナーを保育室に継続的に設置したことで、子どもたちは自分のタイミングで繰り返し遊びに関わることができ、試行錯誤しながら遊び方を工夫したり、扱いに慣れていったりする姿が見られた。こうした継続的な関わりは、遊びの発展や持続性を高める上で有効であった。

一方で、環境が充実し常設されたことで、子どもたちがいつでも触れられるようになり、遊びの中で頻繁に出し入れが行われる場面も見られた。また、人気が集まることで順番を巡るトラブルや関わりの難しさが生じることや、物が増えたことで遊び方のイメージやルールの共有が難しくなる場面もあった。さらに、食材を種類ごとに分けたことで分かりやすさは向上したものの、片付けの際には一つひとつ分類する必要がある、時間がかかってしまう姿も見られた。

これらのことから、今後は遊びの人数や順番を視覚的に分かりやすく示す工夫や、子どもたちが無理なく片付けやすい環境構成、遊び方を共有しやすい援助の在り方をさらに検討していく必要があると考える。子ども一人ひとりが安心して遊びに関わりながら、友だちとイメージを共有し、言葉でのやり取りを深めてい

けるよう、引き続き環境と援助の工夫を行っていききたい。

<おままごと遊びの様子>

